

平井松午・島津美子 編

『(稿本・大名家本) 伊能図研究図録』

創元社 2022年2月 342頁 16,500円(税込)

本書は、精緻な技法で作製された伊能図の実像に迫る貴重な成果である。伊能忠敬の全国測量に基づいて江戸幕府に上呈された「大日本沿海輿地全図」の正本や、伊能家に残されていた副本は既に失われている。一方で、幕府重臣や各地の大名に献上された地図やそれらの写本は約200点が確認されている。本書は、多義にわたる伊能図のなかから主に稿本や大名家本に注目し、図面に記載された情報の検討に留まらず、料紙や彩色、針穴といった観点から伊能図をモノとして分析することを主眼としている。

本書については優れた書評¹⁾がある。既に指摘されているとおり、本書は、ひとえに伊能図を対象とした成果に留まらず、地図史研究の最前線に位置づけられる。また、本書の特徴は「研究図録」という書名に体现されている。図録とは、いわば図版入りの目録である。本書には各図の全体像だけでなく、部分図や顕微鏡写真、針穴を写したバックライト撮影写真といった各種の図版が収められ、掲載された伊能図の図版は約150点に及ぶ。342頁からなる本書の物理的な重厚さは、編者らによる調査の蓄積を如実に体现している。

伊能図をモノとして分析しようとした編者らの意図を踏まえれば、本書に掲載された図版は、論文に添えられた資料写真(挿図)のように文章を構成する部分としてではなく、一つ一つが研究成果として意味を持っている。伊能図に限らず大型の地図資料は、まずもって全体像の撮影が容易ではない。特に本書には2m四方を超える伊能図が多く収録されている。本書冒頭の例言によれば、掲載された地図図版は所蔵機関から提供を受けたもの、ウェブサイトからダウンロードしたもの、専門業者に依頼して撮影したもの等が含まれている。本書のために新規で用意されたものが全てではないとしても、まずは、これだけ多くの図版を一堂に集めた労力が偲ばれる。さらに、本書には顕微鏡撮影やバックライト撮影といった技術を駆使した図版が多数掲載されている。また、各図版について料紙や彩色、針穴に関する詳細な情報が記載されるとともに、巻末では横断的な分析結果

がまとめられている。

本書の稀有な点は、個々の資料の細部を分析し、当該資料の性格を理解するとともに、それらの集合体であるところの伊能図の全体像に迫るアプローチにある。本書が「あまりに精緻な描画や記載内容は、むしろ地図作製技法を解明する上で障壁となってきた」(2頁)と指摘するとおり、個々の伊能図の細部に宿る精緻な情報の分析と、集合体としての伊能図の俯瞰的な理解を両立するのは容易ではない。本書は、描画や記載内容よりもさらに細かなミクロスケールで伊能図を観察しながら、一方で150点に及ぶ図版を通じて、総体としての伊能図に迫ろうとしている。評者は、編者らの姿勢を、伊能忠敬が1歩ずつ歩いて測量した成果を紡いで、日本図という全体像を生み出した偉業に重ね合わさずにいられなかった。

さて、本書の構成は以下のとおりである。大別して伊能図総論、伊能図図録、伊能図各論の3部からなり、最も厚いのは伊能図図録の部である。

【伊能図総論】

「伊能図」の種類と伊能図調査(平井松午・地主智彦・早川泰弘・村岡ゆかり・島津美子)

【伊能図図録】

本書掲載「伊能図」の概要(平井松午)

掲載地図一覧

伊能忠敬記念館所蔵「伊能図」と下図(紺野浩幸・平井松午)

京都大学附属図書館所蔵「伊能忠敬翁地図」(小田匡保)

東京大学総合図書館所蔵「測地原稿図」(平井松午)

国文学研究資料館所蔵「沿海地図」中図・小図(平井松午)

徳島大学附属図書館所蔵「沿海地図」と「大日本沿海図稿」(平井松午)

松浦史料博物館所蔵「実測地図」(伊能大図・中図・小図)(久家孝史)

山口県文書館所蔵「御両国測量絵図(伊能大図)」(平井松午)

学習院大学図書館所蔵「大日本沿海輿地全図」(伊能中図)(平井松午)

宮城県図書館所蔵「沿海地図」(伊能中図)(平井松午)

国立国会図書館所蔵「伊能図」(平井松午)
国立歴史民俗博物館所蔵(秋岡武次郎古地図コレクション)「伊能図」(三河雅弘)
早稲田大学図書館所蔵「伊能図」(藤原秀之)
神戸市立博物館所蔵「伊能図」(小野田一幸・永山未沙希)
長崎歴史文化博物館収蔵「伊能図」(平岡隆二)
広島県立歴史博物館所蔵(守屋壽コレクション)「従尾張国至蝦夷北極出地度量図」(沿海地図小図)(平井松午)
ゼンリンミュージアム所蔵「実測輿地図」(伊能小図)(平井松午)

【伊能図各論】

伊能図と料紙(地主智彦)

伊能図にみられる彩色材料と技法(島津美子)

まず、冒頭で「伊能図総論」として本書の目的や方法が記載されている。これによれば、本書の内容は、主に以下2つの取組成果に基づいている。第1に、2014(平成26)年度と翌年度に徳島大学附属図書館事業として実施された「徳島大学附属図書館伊能図検証プロジェクト」(「伊能図検証プロジェクト」)である。第2に、2018年度から2021(令和3)年度にかけて、本書の編者の一人である平井松午氏を研究代表者として実施された科学研究費補助金・基盤研究(A)(一般)の研究課題「伊能図の成立過程に関する学際的研究—忠敬没後200年目の地図学史的検証—」(「伊能図科研」)である。「伊能図検証プロジェクト」では徳島大学附属図書館が所蔵する伊能図10舗を対象にして非破壊調査等が行われた。これを発展させた「伊能図科研」は、超高精細画像撮影や非破壊調査といった最新技術を用いて、伊能忠敬記念館をはじめ10機関が所蔵する伊能図等を主な調査対象に据え、これらを科学的に検証しようとするものであった。本書は、この「伊能図科研」の研究成果の一つである。なお、平井氏は、本書とは別に伊能図に関する論集をまとめている²⁾。関連して、神戸市立博物館では2021年に特別展「伊能忠敬」が開催された。1821(文政4)年に「大日本沿海輿地全図」が幕府に上呈されてから200年の節目を迎えたことを記念した展覧会であり、本展には「伊能図科研」による最新の科学研究調査の成果が反映されている³⁾。これらの取組

は、近年の地図史研究の一つの到達点を示すものであり、歴史地理学分野における顕著な成果として、今後、隣接分野も含めて共有されるべきと考えられる。

ところで、伊能図の正本や副本が失われている状況で、本書が主な分析対象としたのは下図や定稿図、さらには大名家本であった。本書は、これらの分析を通じて、正本を欠く伊能図の実態や成立過程の一端を明らかにしようとしたもので、そのための具体的な調査方法が紹介されている。例えば、目視調査では、伊能図に特徴的な調査項目としてコンパスローズ(方位盤記号)の方位数や針穴の有無等が挙げられ、調査を標準化しようとした工夫が分かる。また、高精細画像データを用いた地図解析、料紙調査の方法とともに、自然科学的な分析手法による彩色材料の調査として、顕微鏡撮影、可視反射分光スペクトル測定、蛍光X線分析の手順について記載されている。本項では、顕微鏡撮影機器である高画素デジタルマイクロスコープ(スカラ株式会社のDG-3x)やデジタルマイクロスコープ(ANMO社のDino-Lite)をはじめ、調査に用いられた各種の機種が具体的に紹介されている。本書で示された手法は、伊能図の分析に有効であるのはもちろん、広く地図史研究に寄与するものである。よって、本項の詳細な情報は、読者が同様の手法を各々の分析対象に応用する際に大いに参考になるだろう。

総論に続くのが、本書の主眼とする「伊能図図録」の部である。本項は、16機関に所蔵される伊能図について、その特徴から便宜的に稿本・下図、大名家本、コレクション本に3分類し、それぞれ解説や地図1点ごとの図版、彩色調査の分析結果を掲載している。

第1に、稿本・下図として伊能忠敬記念館、京都大学附属図書館、東京大学総合図書館の3機関が所蔵する伊能図が取り上げられている。このうち伊能忠敬記念館は、62頁(全体の23%)と最も多くの紙幅が充てられている。同館が所蔵する伊能図は原図や下図といった未定稿図と位置づけられ、幕府に上呈された正本や副本の成立過程を理解するにあたって不可欠な分析対象である。掲載された図版は、全体図、題簽等を拡大した部分図、針穴を写したバックライト撮影写真のほか、彩色部分等を写した顕微鏡写真がある。顕微鏡写

真を確認すると、鉱物から作る岩緑青、金色の真鍮粉、青色ガラスを粉末にした花紺青といった顔料の形状が良く判別できる。また、同じく彩色部分について蛍光X線分析及可視反射分光スペクトル測定を実施した結果が示されている。

伊能忠敬記念館所蔵の伊能図は、1800(寛政12)年の第1次測量にはじまり、1815(文化12)年から翌年の第9次測量にかけての各次の測量成果に基づく図が取り上げられている。このうち、評者は第9次測量で伊豆半島や伊豆七島を対象としたものに関心を持った。例えば、伊豆半島東部を詳細に描いた記念館33「自豆州賀茂郡吉佐美村至相州足柄下郡小田原宿沿海地図」(74-75頁掲載。資料名の前に付した番号は本書掲載の地図番号を示す。以下同様)は、吉佐美(現静岡県下田市)から小田原宿(現神奈川県小田原市)にかけての帯を対象とする大図(縮尺3万6千分1)である。評者は、所属機関で担当した展覧会において、この第9次測量の中図(縮尺21万6千分1)の写しと推測される「豆州相州沿海街道並七島図」(神奈川県立金沢文庫所蔵)に接した⁴⁾。同図は、伊豆半島東部から小田原にかけての帯、房総半島の鋸山等の山頂、伊豆七島を朱色の方位線で結び、それらの位置関係を図示したものである。幕府天文方の高橋景保による小引(端書)があるが、筆致から写本であろうと指摘されている。本書の分析方法を応用すると、同図に関する従来の理解の妥当性が検証できるかもしれない。

また、東京大学総合図書館には伊能忠敬が作製したとされる「測地原稿図」93枚が所蔵されている。これらのほとんどは中図または小図の原稿図であり、なかでも東大図1_2「五十二番」(123頁掲載)については作業時間が試算されていて興味深い。同図の分析によれば、1時間平均14.0か所の測点・測線や各種の情報を描画した計算になり、相当に根を詰める作業であったと推察されている。加えて、これらの「測地原稿図」が上呈本の中図や小図の地図下図(原稿図)である可能性を指摘し、検証のために針穴位置を確認している。例えば、「測地原稿図」のうち中図原稿図の一つと、同じく徳島大学附属図書館所蔵の伊能図中図とを比較した結果、おおむね重なり合う様子が確認できる。ここで重要なのは、検証結果が図版として掲載されている点である(東大図1_3、

124頁掲載)。「おおむね」という表現のとおり、針穴は完全には重ならず部分的に取捨選択されていた様子が分かる。また、このような比較を可能にしているのは、600~800ppi程度の解像度を有する高精細画像データである。東京大学総合図書館及び徳島大学附属図書館は、いずれも高精細画像データをウェブサイトで公開しているため、針穴位置の比較が実現した。これらの事例から、各機関でのデジタルアーカイブの整備が研究を支えている状況を再認識した。

第2の分類は大家本で、国文学研究資料館、徳島大学附属図書館、松浦史料博物館、山口県文書館、学習院大学図書館、宮城県図書館の6機関の伊能図が紹介されている。このうち旧蔵者が明確なものは3件あり、例えば徳島大学附属図書館所蔵の「沿海地図」と「大日本沿海図稿」は、蜂須賀家旧蔵の伊能図である。本図は、大名献上本の装丁を唯一色濃く残しているだけでなく、伊能忠敬による測量成果や地図仕立てを精緻に反映した針穴本の伊能図として、文化財的価値が高く評価されている。また、本図と同様に幕府上呈本も均一の大きさに折り畳まれ題簽を付して桐箱に収められていた可能性が指摘されている。このように、編者らは針穴や顔料といった肉眼では捉えにくい微細なレベルで分析するだけでなく、装丁や外箱といった形状の観察も通じて伊能図を理解しようと努めている。

さらに、松浦史料博物館所蔵の「実測地図」は、もとは平戸藩主の松浦家に旧蔵されていたものであり、幕末期の海防を目的として伊能大図が実務に転用された事例として位置づけられる。このうち松浦博7_1「実測地図 西国海路図」(172-173頁掲載)に描かれたコンパスローズのフルール・ド・リス(北を示す印)の先端部分を撮影した顕微鏡写真からは、緑色の彩色に使われた岩緑青の粒子が明瞭に見て取れる。

第3の分類として挙げられるのがコレクション本である。本項には、国立国会図書館、国立歴史民俗博物館、早稲田大学図書館、神戸市立博物館、長崎歴史文化博物館、広島県立歴史博物館、ゼンリンミュージアムの7機関に所蔵される伊能図が取り上げられている。例えば、神戸市立博物館は、わが国でも比類ない古地図コレクションを有する施設として知られている。同館については

10点の伊能図が本書に収録されていて、このうち7点は南波松太郎コレクションに含まれるものである。また、3点は同館とその前身の一つである神戸市立南蛮美術館によって収集されたもので、近年では2013年に購入された神戸博10「近江国及附近絵図」(265頁掲載)がある。続いて、早稲田大学図書館には6点の伊能図のほか、伊能忠敬関係資料が所蔵されているが、もともと伊能図であることを意識して収集されたのではなく、近世史資料や洋学(蘭学)資料との関係から受け入れられたものであった。これらは、いずれも各機関が独自に収集したものであり、既に触れた稿本や大名家本として取り上げられた伊能図とは異なり、作製の目的や伝来の過程はそれぞれである。その意味で、このコレクション本は、多義にわたる伊能図総体の縮図とっていいのかもしれない。本項には96頁(全体の約36%)が充てられる。本書の書名に「稿本・大名家本」の分類が冠せられているとおり、これらが主たる分析対象であることは間違いないが、コレクション本の豊富さもまた本書の魅力である。

コレクション本のうち国立国会図書館の伊能図は、古典籍資料に分類される地図群と、気象庁旧蔵の明治期に模写された大図(43枚)に大別される。前者のうち、国会図2「伊能日本実測小図二」(207-208頁掲載)について、合印(凡例)に示された郡界は掲載図版を肉眼で見る限りは黒色の丸で示されているように観察される。しかし、これを蛍光X線分析すると、鉛と水銀が検出された。鉛は赤色の無機顔料である鉛丹に使われ、鉛丹は黒く変色する性質が知られている。よって、郡界の凡例は当初、赤色の丸で示されていたが、変色したため現在は黒色の丸となった経緯が判明する。本書に用いられた分析手法が、現時点における資料の肉眼での観察からは分からない伊能図作製当初の情報を引き出した好例といえよう。同様に、肉眼の観察と彩色調査の結果が食い違う結果として、気象庁旧蔵の「大日本沿海輿地全図」も興味深い。同図は、1873(明治6)年頃に工部省測量司が模写したものと推定されている。その点で、江戸時代に模写された伊能図とは異なる技法が用いられていた可能性が想定される。このうち国会図6_1「第90図 武蔵・下総・相模」(214-217頁掲載)のコンパスローズを彩る青色絵具は、

肉眼で観察される色の鮮やかさから、輸入の合成顔料であるプルシアンブルーが使われた可能性が考えられる。ところが、蛍光X線分析の結果はプルシアンブルーの存在を示す成分である鉄は、彩色のない部分とほぼ同程度の検出に留まっている。結果の相違を整合的に理解するためには、さらなる分析が必要であろう。

最後に、「伊能図図録」の部に続いて「伊能図各論」として2本の論考が収められている。これらは、本書が主眼とする伊能図のモノとしての分析結果を横断的にまとめたものである。まず、「伊能図と料紙」は、従来の料紙研究を踏まえて、伊能図の料紙が政治性・社会性(身分格式)や機能性(実用性)から選択・使用されていると推察する。伊能図の料紙が使い分けられているという指摘は従来からあったが、具体的には検証されていなかった。そこで、古文書学の観察方法に基づいて料紙名を比定するなどした結果が一覧表で示されている(320-322頁掲載)。次に、「伊能図にみられる彩色材料と技法」は、様々な伊能図の関係性について、特に彩色材料や技法から分析することを目的とし、その結果も一覧表で整理されている(326-327頁掲載)。これらの論考で示された成果を踏まえて、再度「伊能図図録」の部で展開された各図の記述を検証すれば、さらに理解が深まるだろう。

本書を通読して、博物館に勤務する評者は、編者らが本書に「研究図録」という名を冠した意図に共鳴した。博物館や美術館では、研究成果を展覧会として公表するとともに、図録という形で後世に残す。様々な場所から一つの会場に集められたモノは、展覧会の趣旨に沿って再構成され、展示期間を終えると再び元の場所へ戻っていく。展覧会とは実に儂いものであるが、図録は形に残る。学芸員は、図録に掲載された図版が後の研究の基盤となるように願いながら編集作業にあたっている。本書が長く研究基盤として参照されるべき好著であるのは間違いないが、評者の拙い文章では本書の大きな魅力である豊富な情報量を存分に紹介しきれなかった。そのため、読者各位におかれてはぜひ一度本書を手に取り、貴重な成果を目の当たりにしてほしい。

(武田周一郎)

【注】

- 1) 上杉和央「書評 平井松午・島津美子編『〈稿本・大名家本〉伊能図研究図録』」人文地理74-3, 2022, 354-355頁。
- 2) 平井松午編『伊能忠敬の地図作製—伊能図・シーボルト日本図を検証する—』古今書院, 2022。また、同書については次の書評がある。上杉和央「書評 平井松午編『伊能忠敬の地図作製—伊能図・シーボルト日本図を検証する—』」人文地理74-2, 2022, 186-187頁。
- 3) 神戸市立博物館編『伊能図上呈200年記念特別展 伊能忠敬』神戸市立博物館・NHKエンタープライズ近畿・朝日新聞社, 2021。
- 4) 神奈川県立歴史博物館編・発行『地図最前線—紙の地図からデジタルマップへ—』2022, 17頁。